

# 枯れ葉剤被害の実態

ベトナム戦争で、米軍は1962年から1971年までの10年間にわたり、「枯れ葉剤」と称されるダイオキシンを含んだ化学薬品を戦場や森林地帯に空中から大量に散布しました。

散布された主な地域は、当時の南ベトナム中部高原、旧サイゴン市（現ホーチミン市）の北西部、それにメコンデルタの南部などで、配布面積は旧南ベトナム全土の4分の1にあたる2万3360平方キロ、散布総量は8千万リットルと言われ、2回の散布で森林の5割から8割が枯れたといわれています。

目的は、森林を枯らして解放戦線の根拠地を発見すること、解放戦線の支配地区に暮らす住民の食料を断つためでした。枯れ葉剤が散布された地域で暮らしていたベトナムの人々は、散布直後から気分が悪くなり、下痢や呼吸困難になる人が続出しました。

さらに、神経障害や目が見えなくなるなどの障害が現れ、枯れ葉剤を浴びた妊婦には死産・早産や奇形児の出産などの現象が現れました。また、豚や牛などの家畜も下痢が続き、やがて死んでしまいました。被害は、ベトナムの民衆だけでなく、枯れ葉剤散布作戦に参加した米軍兵士にも及びました。

後年、このような被害の原因は、枯れ葉剤に大量に含まれていたダイオキシンによるものであることが、明白になっています。そしてベトナムでは、戦後30年以上経った今日でもなお、ダイオキシンの影響と思われる子供が生まれています。

